自愛と他愛及び辯證法

一

我々は通常自己自身を愛するといふことは自己の欲求を満足させることと考へて居る。欲求なくして自己といふものなきことは云ふまでもない。併し自己と欲求とは爾く直に同一視することができるであらうか。身體なくして我といふものなく、肉體的欲求と考へられるものが最も強い我々の欲求といふことができるであらう。而も我々を苦めるものは肉欲と考へることもでき、又徒らに肉欲を満足させることは自己を失う所以と考へることもできるであらう。さらばと言つて名誉欲の如きは云ふまでもなく、知識欲とか創作欲とかいふ如き所謂精神的欲求と考へられるものであつても、苟もそれが欲求として考へられる以上、直に自己そのものではない。自己と欲求とは如何なる關係に立つものであらうか。

欲求とは如何なるものであるか、如何にしてかかるものが考へられるか。生理学者は欲求とは生理

作用に過ぎないと云ふでもあらう。渇して水を求め飢えて食を欲すると考へられる如く、肉體的欲求といふものは生理作用に基くと考へざるを得ない。併し生理作用といふものが直に欲求でもなければ、又生理作用から欲求といふ如き意識現象が出るとも考へられない。渇を覺える我は水素二、酸素一の水を求めるのではなく、清らかな旨い水を求めるのである。すべて我々に對して直接にあるものは、單なる知的對象ではなくして、欲求の對象といふことができる。すべてのものが我々に對し關心の意義を有つて居るといふことができる。花は美しき花であり水は味よき水である。すべてが我々の心を唆るもの、情意的内容を有つたものと云ふことができる。かかる意味に於ての有るものは、如何なる意味に於て有るものであるか。或いは客観的に有るものは物質といふ如きものであつて、所謂情意的内容といふ如きものは主観によつて付与せられたものと云ふでもあらう。併し物質といふ如きものは、固、考へられたものに過ぎない。私は右の如き意味に於て我々に對し直接にあるもの、即ち具體的有と考へられるものは、その根抵に於て自己自身を表現する意義を有つたものと思ふ。それは物といふ意味に於てあるのでもない、表象とか感情とかいう意味に於てあるのでもない。その内容は何らかの意味に於ての力といふべきものではなくして、表現の内容といふ如きものでなければならない。それは藝術の内容とか思惟の内容とかいう如きものと同様の性質を有つたものでなければならない。美とか眞理とかが我々の心を動かすと考へられる如く、欲求の内容が我々の心を動かすのである。併し欲

求の内容は直に欲求そのものではない。欲求とは單に自己自身を表現するものではなく、自己自身を實現する意味を有つたものでなければならない。單に生理作用といふ如きものから欲求といふものが考へられない如く、單に自己自身を表現するものからも、すぐに欲求といふものは考へられない。表現の内容たる意味を荷うものとしては、まず符号とか象徴とかいうものを考へることができるであらう。併し此等のものに於ては、意味と意味を荷ふものとが互に外部的である。藝術的作品といふ如きものに至つては、現れた形とか音とかいうものが直に自己自身を表現するものである。併しそれも假相に過ぎない自己自身を實現する意味を有つたものでないことは云ふまでもない。表現の内容にして自己自身を實現する意味を有つた欲求といふものが考へられるには、我々の身體といふものが考へられねばならない。身體と考へられるものは、一方に行為の機關の意義を有すると共に、それが自己自身を表現する意味を有つて居るのである。そこでは働くものと自己自身を表現するものとが一になつて居る。非時間的と考へられる表現の世界と時間的と考へられる實在の世界とを對立的に考へれば、我々の身體と考へるものは両者の接触點と考へることができる。自己自身を表現するものは身體に於て自己自身を實現する、即ち自覺するといふことができ、單なる表現とは身體なき行為と考へることができるのである。我々の欲求と考へるものはかかる意味での身體の内容でなければならない。身體が欲求のヒポケーメノンといふことができ、逆に欲求が身體を作ると考へることもできる。身體なく

して欲求といふものなく、欲求なくして身體といふものはない。生理学者は合目的的なる有機體といふものを考へ得るであらう、併し自己の身體は自己の欲求から考へられなければならない。

我々は普通に非時間的なる表現の世界と時間的なる實在の世界とを分ち、後者に於て更に精神と物體との両界を区別し、身體といふのはかかる両界の結合と考へて居る。併し我々に最も直接にして具體的と考へられるものは、一方から見れば表現の世界、一方から見れば行為の世界と考へられるもの、即ち私の所謂無の限定の世界と考へられるものであり、身體といふものはかかる世界に於てあるものとして考へられねばならぬ。加之、かかる世界が考へられるには、我々の身體的限定と考へられるものがその出発點となるのであると思ふ。種々の世界と考へられるものは、却つて此から考へられるのである。すべて有るものは時に於てあり、時が實在の範疇と考へられるが、時は現在が現在自身を限定するといふことから考へられねばならない。現在が現在自身を限定すると考へられる所、そこにいつも我々の自己と考へるものがあるのである。私の身體といふものは此に何を意味するか。現在が現在自身を限定するといふことは、それ自身が固、矛盾でなければならない。それは唯、主語的方向に、即ちノエマ的方向に、絶對に限定するものなきものの自己限定、即ち無の自己限定として考へられるのである。一般者の自己限定に於て、その一般者と考へられるものが何らかの意味に於て限定せられたものと考へられるかぎり、之に於て時といふ如きものは考へられない。かかる限定の極限としては

個物といふ如きものを考へることができるであらう。更にかかる限定が無の限定によつて裏付けられて居ると考へられる時、個物から個物へ移る、即ち點より點に移る無限なる直線的限定、即ち過去から未来に流れる直線的時といふ如きものまで考へることができるであらう。限定するものなきものの限定といふことは、固、特殊から特殊に移るといふことでなければならない、個物が個物に移るといふことでなければならない、點が點を生むといふことでなければならない。具體的論理の立場に於ては、ヘーゲルも然考へた如く個物が一般者でなければならない。併し尚個物から個物への動きは考へられない。かかる動きは唯、一般者の一般者として無の限定といふ立場からのみ考へられるのである。無の限定といふことは個物から個物に移る、點が點を生むといふことであり、逆に個物から個物に移る、點が點を生むといふことは無の限定といふことができるであらう。是故に有の一般者の自己限定の極限に於て、それが無の限定によつて裏付けられると考へることによつて、過去から未来への直線的時を考へることができるが、斯くしても尚現在が現在自身を限定するといふ眞の時を考へることはできない。眞の時は無が無自身を限定するといふ立場から考へられねばならぬ。現在が現在自身を限定するといふことによつて考へられる時は、點から點に移るとか、點が點を生むとかいう如く、連續的に考へられるのではなく、その一瞬一瞬に於て消えることによつて始まる、即ち死することによつて生きるといふ意味に於て考へられねばならぬ、即ち非連續の連續として考へられるのである。かか

る限定が考へられるには、單に有の限定の極限に於て無の限定が之を裏付けるといふことによつて考へられるのでなく、即ち對象的限定線に沿うて考へられるのでなく、かかる限定を越え之を内に包むといふ意味がなければならぬ、無が有を包み、無が無自身を、限定することによつて、有が見られるといふ意味が無ければならぬ。對象的に點から點に移るとか、點が點を生むともかいうのでなく、點から點へ飛ぶといふ意味を有つていなければならない、我々の意志作用に於て見られる如く飛躍的な意味を有つていなければならない。かかる限定の極限に於ては、時を包み時を消すと考へることもできる。直線的時に沿うて非連續的とか飛躍的とか考へられた無の限定は、更にかかる意義をも否定し、各自独立なるものを限定する分離的限定と考へることができるであらう(場所的限定といふのはかかるものを意味するのである)。 併しかかる意味に於てあるものは尚自己自身を限定する意義を有つて居る、而して有るものが自己自身を限定するといふことは、時間的に自己を限定するといふことを意味する。無の自己限定の立場からは尚一層進んで非時間的な世界といふものを考へることができる、即ち單なる表現的限定の世界といふものを考へることができる、時は永遠の今の中に包まれ、永遠の今の中に消されるのである。我々の身體と考へられるものは、かかる時を包む永遠の今の限定として之に於てあるものと考へることができる。

我々に直接にして最も具體的な世界、即ち眞の私といふものの居る世界といふのは、所謂物體の世

界といふものでもなければ、意識の世界といふものでもない。我々は直接に廣義における行為の世界、或は表現の世界に住んで居るのである、我々は具體的に歴史人としてあるのである。かかる世界が私の所謂無の限定の世界と考へるものであり、而してそれは現在が現在自身を限定するといふ意味に於て時の世界と考へることができる。無の限定の世界に於てあると考へられるものは、総じて時間的に自己自身を限定するものでなければならない、而も無の限定は時を包むといふ意味に於て非時間的なるものを含むことができる。無の限定として直接にあるものは、時間的に自己自身を限定すると共に表現の意味を有つたものでなければならない、一言にして云へばすべて身體的意義を有つたものでなければならない。私の所謂無の限定の世界に於てあるものは、すべて身體的に自己自身を限定するものであり、無の自覺として眞の自己と考へられるものは身體的自己といふことができる。眞の我は生理学者の考へる如く脳の皮質に於てあるのでもなければ、心理学者の考へる如く意識に於てあるのでもない、行為的に自己自身を限定する身體的自己として廣義における歴史の世界に於てあるのである、所謂意識我といふ如きものは考へられたものに過ぎない。現在が現在自身を限定すると考へられる所、そこに自己があると考へられる。如何にして斯く考へられるか。現在が現在自身を限定するといふことは、上に云つた如く有の限定の極限として考へられるのでなく、無の限定から考へられるのでなければならぬ、それは時を包むといふ無の限定によつて基礎付けられていなければならない。かかる立

場からは、現在が現在自身を限定するといふことは、未来から過去を限定する意義を有し、そこに行為の意義がなければならない、上に云つた如く飛躍的限定の意義がなければならない、自由意志の意義がなければならない。現在が現在自身を限定する所に、自己があると考へられる所以である。かかる限定に於て自己自身を限定する現在といふものが自己と考へられるのである。而してそれは無の限定によつて基礎付けられた時の限定として、身體的自己と考へられるものでなければならない。眞の自己といふべきものはどこまでも時間的に自己自身を限定すると共に、自己自身を表現する意味を有つたものでなければならない、時間的・表現的に自己を限定するもののヒポケーメノンといふべきものでなければならない。無が無自身を限定するといふ意味に於てそれは自己と考へられ、有るものが無の限定としてあるといふ意味に於てそれは身體と考へられるのである。故に身體はいつも有に接してあると考へられる。物心平行論者の如く物體界に沿うて身體といふものが考へられるのである。併し無が無自身を限定する立場からは、身體的限定の意義は尚一層深められねばならぬ。時を包み時を限定する我々の自己は、瞬間が瞬間自身を限定すると考へられる底に於て、自己自身を失うと考へられねばならぬ。そこに我々は身體を離れた自己といふものを考へる、無自身の限定として飛躍的に點から點に移る意味に於て自由意志的自己といふものを考へることができる、而してそれが眞の自己と云ふべきものでなければならぬ。併しそこでも普通考へられる如く單に超身體的となるのでなく、か

かる意味に於て非合理的に自己自身を限定する自己といふものが考へられるかぎり、そこに身體的意義がなければならぬ。我々の人格と考へるものはかかる意味に於ての身體といふべきものでなければならぬ、人格とは昇華せられた身體に外ならない。我々はこの歴史的世界に於て一つの人格として生きるのである。かういふ立場からは身體とは逆に物質化せられた人格といふことができる。行為的にして表現的であり、無の限定として點から點に移り行く非連續の連續と考へられるものは、人格といふ如きものでなければならない。人格的統一と考へられるものは之を意識内に求められるものでもなければ、況して之を生理的肉體に求むべきものでもない。唯それは所謂客観的精神といふ如きものと同様の意味に於て有と考うべきものである。昨日の我と今日の我と直に結合するのは所謂意識内に於て結合するのではない。然らばと言つて脳の皮質がかかる役目を演ずるとも考へられない。それは歴史的世界における行為的表現の統一として考へられるのでなければならない。而してそれが我々に最も直接なるものである、否それが眞の私といふものである。眞の意識統一といふものは此に求めねばならぬ。我々の人格的統一の底には深い非合理的なるものがあると考へられねばならぬ。併しその非合理性が單なる非合理性と考へられる時、即ち外にあると考へられる時人格的統一といふものはない。人格的統一といふものが考へられるには、それは限定するものなきものの限定といふ意味に於ての非合理性でなければならない、外が内であるといふ意味を有つていなければならない、それは現在が現

在自身を限定する意味に於ての非合理性でなければならない。デカルトのコギト・エルゴ・スムの自己はかかる意味に於てあるのである、それは事實が事實自身を限定する意義を有つものでなければならない。心理学者の所謂意識統一といふものは、却つてかかる立場から考へられたものに過ぎない。行為的・表現的統一としてある具體的自己から、その行為的限定の意義を極小にしたものが所謂意識統一と考へられるものである。現在が現在自身を限定すると考へられる所には、時間的なると共に非時間的なる意味がなければならない。かかる立場から抽象的にその能限定の意義に於て意識界といふものが考へられ、その所限定の意義に於て物質界といふものが考へられるのである。

それで、我々は身體的自己として直接に行為的表現の世界に於てあり、かかる世界に於てあるものは自己自身の欲求を有し、身體的に自己自身を限定すると云ふことができる。ノエマ的限定として身體的と考へられるものは、ノエシス的には欲求の意義を有つて居るのである。ショーペンハウエルと共に、我々の身體は直接に内から見れば意志といふことができる。單に物理的・科学的物體と考へられるものが、我々の身體と考へられるのは、意志の表現としてでなければならぬ。無の自己限定として現在自身の自己限定の有する飛躍的限定とは、固、欲求といふ如きものでなければならない。欲求に於ては非連續的なるものが連續を求めるのである、個物的なるものが一般的なるものを限定しようとするのである。かういふ意味に於て我々の欲求の内容は歴史的といふことができる、我々は歴史人

として欲求を有つのである。我々の欲求と考へるものは、時間的存在でなければならない、それは時に於て生れ、時に於て亡びゆくのである、而もその生れるのは死すべく生れるのであり、その亡びゆくのは生れるべく亡びゆくのである。欲求は満足によつて消え、満足は更に欲求を生むのである、欲求は辯證法的存在でなければならない。厭世論者が此世界は苦悩の世界であり、人生は泡沫の如しと考へる所以である。併し我々の人格と考へるものは、かかる意味に於て限定するものなきものの限定としての有である。我々の人格的自己は瞬間が瞬間自身を限定するといふ永遠の今の自己限定の意味に於て自己自身を維持するのである。もし之を對象的方向に求めるならば我といふものはない、我々の身體と考へるものも同様である、身體は唯、死すべく生れるものである。所謂自然界といふ如きものを實在界として考へる人は、かかる人格といふ如きものを有として考へることはできないであらう。併し所謂物質界と考へられるものも、事實を基礎として考へられたものに過ぎない、而も事實そのものは固、時間的であり、人格的でなければならない。水は直接に水素二、酸素一として有るのでなく、甘き水として有るのである、否、人格的色合を有つた出来事として有るのである。かういふ意味に於てはすべて具體的に有るものは、何人かの人格的事實として有るのであり、ショーペンハウエルの如くすべて有るものは意志であるといふことができる。唯それはショーペンハウエルの考へた如く物自體といふ如きものではなくして行為的・表現的として歴史的事物といふべきものでなければならない。

ショーペンハウエルの如く意志が盲目的と考へられるならば、それは意志でなくして衝動といふ如きものでなければならない。加之、全然盲目的意志と考へられるものは單に力といふ如きものに過ぎない。我々の意志と考へるものは有の限定として考へられるのではなく無の限定として考へられるのである。然らざれば意志を辯證法的と考へることができず、辯證法的といふことなくして意志といふものは考へられない。ヘーゲルに徹底することによつて眞にショーペソハウエルに到ることができ、ショーペンハウエルに徹底することによつて眞にヘーゲルに到ることができる。両者相反すると考へられるのは、有の論理を脱し得ないからである。意志の非合理性といふのは、自己に於て自己を合理的に限定する、即ち合理的なるものを包むといふ場所的限定の意味に於てでなければならない。ノエマ的方向に見られる非合理性といふのは、かかる非合理性の射影に過ぎない。自己自身の中に時を限定すると考へられる私の所謂無の自己限定は、その時を包むといふ意味に於てどこまでも時を否定し、ノエマ的方向にヒポケーメノンを見るといふ意味を有つて居るのである。併しかかる意味に於て非合理的と考へられるものは、考へられた非合理的であり、それは唯合理化せられるべきものであり、メ・オンたるに過ぎない、ギリシャ哲学の質料は大體に於てかかるものを意味したのである。ハルトマンはヘーゲルとショーペンハウエルの統一を無意識に求めた。併し意志とイデヤとは無意識といふ如き概念によつて統一せられるのではなく、イデヤとは意志的に自己自身を限定するものの自覺的内容、

即ち人格的限定の内容でなければならない。限定するものなきものの限定として、イデヤ的なるものが見られるのである、最も明らかなる内容としてイデヤ的なるものが見られるのである。ハルトマソの無意識といふ如きものは、行為的表現の世界即ち歴史的世界と考へられるもののノエマ的方向に投げられた絶對無の射影に過ぎない。

二

愛とは如何なるものであるか。我々は人を愛するといふことをいふと共に物を愛するといふことも云ふのである。スピノーザは愛とは外的原因の表象を伴う喜びであると言つて居る。併し私は厳密に云へば、我々は物を欲するといふことはできるが、物を愛するといふことはできない、愛の對象は唯、人でなければならないと考へるのである。物は欲求の對象となるも、愛の對象となることはできない。主観的感情の立場から大まかに外的原因の表象を伴ふ喜を愛といふことができるかも知れぬが、その外的原因が何であるかによつて、情緒の内容は異なつて来なければならない。我々の情緒そのものが固、一種の對象的限定として具體的に見られるべきものでなければならぬ。欲求に於ては、スピノーザのいふ如く我々の自己は小なる完全から大なる完全に移ることによつて喜ぶと云ひ得るかも知らぬが、愛に於ては、自己が自己を否定することによつて喜を得るのである。些にても自己の欲求の満足

といふ意味が含まれて居るかぎり、純なる愛といふことはできない。自己を否定することによつて自己を見出す所に、眞の愛があるのである。愛の對象は人でなければならない、單なる物に於て、我々は我々の自己を見出すとは云へない。欲求しない天上の星は美しと言われる如く、美に於ても我々は我々の自己を脱却すると云ひ得るであらう。併しそれは自己が自己を失うのであつて、現實に自己をそこに見出すのではない。美は享楽の對象であつて、愛の對象ではない。唯、人と人との間にのみ、眞の愛があるのである、そこにエロスと異なつたアガペの意味があるのである。

物とはいかなるものであるか、人とはいかなるものであるか、如何にしてかかるものが考へられるか。そして我々が物を欲するとか、人を愛するとかいうことは、如何なることを意味するのであるか。私は物といふものをまず廣き意義に於て判断の主語となるものと考へる。アリストテレスの有るものといふのはかかる意味を有つたものであらう。「範時論」に於ては主語となつて述語とならないものを個物と考へて居る。而して判断といふのは一般者の自己限定として成立すると考へるならば、物は個物といふものに至つても、どこまでも一般者の自己限定として、之に於てあるといふ意義を有つていなければならない、即ちその外延の意義を有つていなければならない。それ故に何らかの意義に於て我々に一般概念といふものが考へられるかぎり、即ち一般者が限定せられるかぎり、その自己限定として判断といふものが成り立ち、之に於てあるものとして物といふ如きものが考へられるのである。

すべて對象界と考へられるものは、かかる意味に於て考へられるものであらう。然るに我々の自己といふものは、どこまでもかかる意味に於て考へられるものでない、即ち對象的方向に考へられるものでない。もしかかる意味に於て考へられるならば、それは自己ではなくして物となるのである。例えば、自己とは考へるものとか、欲するものとか言つても、既に對象化せられるのである。我々の自己は對象的方向と反對の方向に於て考へられねばならない、所謂反省によつて考へられなければならない。對象的方向に考へることのできないもの、主語的に考へることのできないものを考へる所に、自己といふものが考へられるのである。それは思惟そのものを否定することであつて、自己矛盾と考へられるであらう。併しかかる矛盾が考へられる所に、自己があるのである、コギト・エルゴ・スムではなくして、コギトと考へる所に自覺があるのである。それで私は自覺といふのは限定するものなきものの限定として考へられると考へるのである。前に限定せられた一般者の限定を有の一般者の限定と考へるならば、之を無の一般者の限定といふことができるであらう。かかる意味に於て考へられた無の一般者は、有の一般者と如何なる關係に於て立つか。有の一般者が無限に自己の中に自己を限定して行くと考へても、個物に達することはできない。個物に到るには、そこに立場の超越がなければならない。個物は有の一般者の限定の極限として考へられるのである。無論、斯く立場の超越によつて極限として個物といふものが考へられるといふには、既に有の限定が無の限定によつて裏付けられ

て居るといふことがなければならない。個物といふのは既に自覺的限定によつて考へられたものである。自己が自己自身を限定すると考へられる所、そこにいつも個物が考へられるのである。眞理の基礎を個物にも求めたアリストテレスの論理は、既に自覺的限定の意義を有つていたのでなければならない。眞の判斷は固、自覺によつて成立するのである。併し自己といふものは單なる個物ではない。個物といふのは唯、自覺のノエマ的限定の極限に於て考へられたものに過ぎない。分類的限定の極限として考へられた個物は、無限なる性質を有つと考へることができる、即ち無限に抽象的一般者を含むと考へることができる。主語となつて述語とならないといふのは、かかることを意味するのである。併し眞に判斷の基礎となる個物はかかる意味に於て考へられたものでなくして、自己自身を限定する意味を有つたものでなければならない、即ち自覺的限定の意味を有つていなければならない、アリストテレスがエンテレケーヤの如きものを考へた所以である。是に於て單に個物が一般的なるものを有つといふのみならず、之を限定するといふ意味を有つて居るのである。働くものといふものは斯くして考へられるものであらう、働くものといふのは個物的にして而も一般的なるものを限定するといふことを意味するのである。併し單に働くものと言つても、それは尚自己といふべきものではない。働くものといふ如きものは、唯、自覺のノエマ的限定がノエシス的限定によつて包まれるといふ意味に於て考へられるのである、有の限定が無の限定によつて裏付けられるといふ意味に於て考へられるの

である。有の一般者の限定といふのは、かかる意味に於て働くものといふ如きものを考へるに至つて窮まる、對象論理はこれ以上のものを考へることができない、ヘーゲルの如く唯一なるものが一般的なるものであるといふに止まる。併しこれでは時といふものすらも考へることはできない、時は點より點に移る、即ち瞬間から瞬間に移るものとして考へられるのである。かかる系列が考へられるには、個物を限定するものがなければならない、併し他から限定せられるものは個物ではない。或は一つの個物が他の個物を限定するとも考へられるであらう、併し眞の個物は他を限定するといふことすら云へない、モナドは窓を有たないのである。個物が個物を限定するといふことも、自己矛盾でなければならない。而も時といふものが考へられる以上、前の瞬間が次の瞬間を限定するとして、かかる矛盾の統一が考へられなければならぬ。限定するものなきものの限定として時といふものが考へられるのである、そこに自覺のノエシス的限定の意義がなければならぬ。時といふものを考へる場合、通常、各瞬間の唯一性といふことが忽にせられて、單なる連續として考へられる。併し時の各瞬間は唯一的でなければならない、非連續の連續として時といふものが考へられるのである。時は單なる連續ではない、その各瞬間に於て消え去るのである、而も斯く死することが生れることであるといふ所に、時の連續があるのである、時は各の瞬間に於て絶對の無に接すると考へられねばならぬ、絶對に無なるものの自己限定として時が成立するのである、私が時は現在から始まるといふ所以である。斯く考へ

る時、時の現在を限定するものは何であるか。群論の語をかりて云へば、現在といふ如き時の要素を結合する結合の法則とは如何なるものであるか。それは自己自身を否定することによつて自己自身を肯定するといふことでなければならない、死することによつて生きるといふことでなければならない、即ち辯證法的限定といふものでなければならない。而してかかる意味に於て自己自身を限定するもの、例えば群のイデソティテートの如きものが、我々の人格と考へるものであり、かかる結合の法則が愛といふものでなければならない。現在が現在自身を限定するといふことによつて自己があるのではなく、自己が自己自身を限定する所に現在があるのである、(時に於て人があるのでなく、人に於て時があるのである)。我々の人格と考へられるものはその一歩一歩が絶對に自由でなければならない、自由なるものの統一として人格といふものがあるのである。自愛なくして自己といふものがないと考へられるが、眞の自愛的限定とはかかる意味を有つていなければならぬ。我々は一つの人格として自己自身を愛するのである。故に我々は他人を一人格として之を敬し之を愛するといふことによつて、自己自身を敬し自己自身を愛するといふことができる。眞の愛は敬を含まねばならない、然らざれば欲であつて愛ではない。愛は無の限定として飛躍的統一でなければならない、唯それが個物的に自己自身を限定すると考へられる所に自己自身を愛するものが考へられるのである。現在が現在自身を限定することによつて時が成立すると考へられる場合、そこに一つの連續的なる時が考へられるのである、

連續的に點から點へ移り行く唯一的時といふものが考へられるのである。而も時は各瞬間に消え各瞬間に生れるものでなければならない、飛躍的統一でなければならぬ、眞の時といふものはかかる限定によつて考へられるのである。愛の限定に於て自己自身を愛するものといふのは自己自身を限定する現在の意味を有つたものでなければならない、唯一的時の意味を有つたものでなければならない、自己自身を限定する現在といふものなくして、時といふものはない。併し他の自己自身を限定する現在に移るといふことによつて、即ち絶對から絶對に移るといふことによつて、自己自身を限定する現在といふものが考へられるのである。自愛といふものなくして他愛といふものはない、併し眞の他愛といふものなくして眞の自愛といふものもない。普通には愛といふことを單に自他合一と考へて居るが、その根抵には敬がなければならない、單なる自他合一は愛ではなくして一種の衝動に過ぎない。アリストテレスは判断の基礎を個物に置いた。かかる場合、個物が自己自身を限定することによつて判断が成立すると考へねばならぬ、個物が一般者を限定するといふことができる。それが具體的一般者といふべきものであり、個物が一般者といふことができる。併しそれまでであつて、それ以上のことを云ふことはできない。前に云つた様に、點から點に移る連續といふものすら考へることはできぬ。かかるものが考へられるには、私の所謂無の一般者の限定として考へられるのでなければならない。かかる一般者の自己限定として主語的に、即ち對象的に點から點への連續が考へられるのである。併し

眞に時といふものが考へられるには、非連續の連續として考へられるのでなければならない。時は現在の底に消え行くものでなければならない、矛盾の統一として時といふものが考へられるのである。かかる限定は一方から見れば、主語的有が主語的有としてどこまでも自己自身を限定しようといふ要求である、個物が個物としてどこまでも自己自身を限定しようといふ要求である、點から點へ移り行かうといふ要求である。而もそれは自己自身を否定することによつてのみ肯定することができるのである、死によつてのみ生きることができるのである。私の無の限定といふのは單なる無とか單なる非連續とかいうものを意味するのではない、有が無の限定としてあり、連續が非連續の連續としてあることを意味するのである。かかる限定によつて限定せられたものとして有るもの、即ち個物はどこまでも自己自身を連續しようといふ要求でなければならない、點から點へ移り行こうとする努力でなければならない。之を表から見れば力といふことができ、之を裏から見れば欲求とか意志とかいうことができる。自己自身を愛することによつて有ると考へられる我々の自愛的自己といふのは、かかる意味に於て有るものでなければならぬ、即ち無の一般者の限定における個物の意味を有つたものでなければならぬ。それはどこまでも自己自身の連續を維持しようといふ點に於て、無限の欲求でなければならぬ。我々の自己が主語的有としてあるといふことは欲求としてあるのである、欲求なくして自己といふものはない。併し自己自身を限定する現在が單に連續としてあるのでなく、非連續の連續とし

てある如く、自愛的自己は自己自身を否定することによつて自己を肯定する愛の限定としてあるのでなければならない。時が單なる連續と考へられる時、單なる直線として時の意義を失ふと考へられる如く、我々の自己が單に欲求によつて限定せられると考へる時、我々の自己は人格としての自己の意義を失うと考へねばならない。

私ははじめ判断的一般者の自己限定といふものから出立して、その極限に於て個物といふものが考へられ、更に之を越えることによつて自覺的限定に到ると云つた。是に於て有の限定から無の限定に転ずると考へることができる。斯く考へられる時、無の限定は有の限定に對して一般者の一般者といふ意味を有つて居ると考へ得るでもあらう。無論、私の無の限定といふものは、有の限定に對して絶對的超越の意義を有し、表からに對し裏からといふ如き意味を有つていなければならぬ。併しノエマ的關係に於て考へられるかぎり、無の限定に一般者の一般者の限定といふ意味があると考へることができる。一般者の一般者の限定とは何を意味するか。それは個物から個物へ移つて行く、點から點へ移つて行くといふことでなければならぬ。一般者の自己限定といふのは個物が一般者であるといふに至つて窮まる、それ以上には出られない。點から點へ連續的に動くといふ如き所謂時の限定といふ如きものを考へるには、一般者の一般者といふ如きものが考へられねばならない、所謂具體的一般者と

考へられるものの一般者といふものが考へられねばならない。一般者の一般者即ち無の一般者のノエマ的限定として、點から點へ連續的に動くものが考へられるのである。個物が一般者を限定するとか、現在が過去未来を限定するとかいうのは、斯くして考へられるのである。然も翻つて考へれば、固、ノエマ的限定の立場よりして、かかるものが考へられるのでなく、死することによつて生きるといふ無のノエシス的限定として考へられるのでなければならぬ。一歩一歩絶對の無に接して、一瞬一瞬に消えると共に一瞬一瞬に生れる永遠の今の自己限定として、ノエマ的には過去より未来へ連續的に動き行く直線的なる時が考へられるのである。それで、ノエシス的に非連續の連續と考へられるものは、ノエマ的に點から點への連續的運動といふことでなければならぬ、かかるノエマとノエシスの關係は離して考へることはできぬ。従来の論理では、眞に點から點への連續的運動といふ如きものの論理的意義が明になつていない、私は唯此の如き辯證法的限定によつてのみ連續的に動くものが考へられるのであると思ふ。然らば、無のノエシス的限定として、死することによつて生きる非連續の連續と考へられるものは何であるか。それは私の所謂自己を否定することによつて眞の自己を見出すといふ愛といふものでなければならない。私はかかる限定を人と人とが限定し合うといふ意味に於て社會的限定と考へるのである。我々の社會といふものが成立するには、その根抵にかかる限定の意義がなければならない。眞の辯證法といふべきものはノエシス的には愛の自己限定と考へられ、ノエマ的には點

から點への連續的運動と考へられるものでなければならない。それで愛の自己限定として社會的限定と考へられるものは、直に所謂個物といふ如きものを限定するのではない。それは一般者の一般者として一般者を限定する意味を有つていなければならない。そこには一般者が一般者自身を限定するといふ如き意味がなければならない。而してそれはノエマ的には個物から個物に移る飛躍的統一と考へられるのである、即ち一つの人格として自己自身を愛するものでなければならぬ。無の限定として歴史的限定と考へられるものは先づ一般者の一般者の自己限定として一般的なるものが限定せられねばならぬ、即ち所謂社會といふ如きものが限定せられねばならぬ。而もかかる一般者の一般者の自己限定として有るものは、いつも點から點へ移る飛躍的統一といふ如きものでなければならない、即ち個人といふ如きものでなければならない。歴史的實在として具體的に有るものは、いつもかかる意味に於て有るものでなければならない。具體的に有るものといふのは、愛の自己限定として社會的に有るのである。それはノエマ的に點より點に移る（即ち行為するものとして）無限なる欲求であると共に、ノエシス的に自己自身を否定することによつて自己自身を見出す愛の自己限定の意味を有つたものでなければならない。

三

私は従来、一般者の自己限定によつて判断が成立すると云つた。併し個物と一般とは、固、離すべからざる關係に立つものでなければならない。一般者が自己自身を限定するといふことは、逆に個物が個物自身を限定するといふ意味を有つていなければならない。一般者が自己自身を限定することによつて判断が成立するといふには、それが個物を包む意味を有つていなければならぬ、否、少くともそれが個物であるといふ如き意味を有つていなければならぬ。ヘーゲルの云ふ如く個物が一般者でなければならぬ。かういふ意味に於て、個物が具體的一般者といふことができ、個物が自己自身を限定することによつて判断が成立するといふことができる。アリストテレスの立場は此の如きものと考へることができるであらう。併し個物が個物自身を限定するとは何を意味するか。個物が個物自身を限定すると云ふには、我々の自己が自己自身を限定する意味がなければならない。個物といふ如きものは、固、我々の自覺的限定によつて考へられるのである。自己のある所そこに「これ」といふものがあるのである、「これ」といふものは向から定められるのではなく、いつも手前から定まるのである。判断は自覺的限定によつて成立するといふことができる。かういふ意味に於て、我々の自己といふものは、個物として具體的一般者の意義を有するといふことができる。併し我々の自己といふものは單に具體的一般者として考へられるものではない、自己といふものは飛躍的統一として考へられるのである、非連續の連續として考へられるのである、即ち有の限定としてでなく無の限定として考へられ

るのでなければならない。かかる限定とは何を意味するか。それはノエマ的には、時が瞬間から瞬間に移ると考へられる如く、點から點へ移るといふことでなければならない、かかるものが動く個物として個性を有つたものと考へられるのである。かかる限定に於ては、絶對から絶對へ移るのである。窓のないモナドから窓のないモナドに移るのである。我々の自己はライプニッツの考へた如く一つのモナドではなくして、モナドからモナドへ移るものでなくてはならぬ。そこに自由意志的自己といふ如きものが考へられるのである。眞に一度的なるものといふのはかかる自己のノエマ的限定として考へられるのである、然らざれば出来事といふ如きものは考へられない。併しかかる意味に於て主語的方向に一度的なるものが考へられるには、それは如何なる意味に於て一般者の自己限定の意味を持つと云ひ得るであらうか。我々の知識は事實が事實自身を限定するといふことから始まるとすれば、そこには何らかの意味に於て一般者の自己限定の意味がなければならない。それは單に個物を限定すると考へられる具體的一般者といふ如きものではない。具體的一般者と考へられる個物を限定するといふ意味に於て、それは一般者の一般者といふ如き意味を有つたものでなければならない。無の限定として一般者の一般者と考へられるものが動く個物を限定し、逆に個物が動くといふことが一般者の一般者の限定として一般者を限定する意義を有つて居るといふことができる。個物が動くといふことは、一般者の一般者の限定として所謂一般者を限定する意味を有つてゐなければならない。そこに非合理

的なるものが合理的として自己自身を限定するといふ眞の辯證法的意義があるのである、質料がイデヤを生むといふことも考へ得るのである。従来は非合理的なるものを考へるに、唯、合理的なるものの立場から考へて居るのである、一般的なるものの自己限定の立場から考へたのである、オンに對するメ・オンを非合理的と考へたのである。併しかかるものは合理化せられるべきものであつて、眞に非合理的なるものではない。眞に非合理的なるものは合理的なるものを限定するものでなければならぬ。而して非合理的なるものが合理的なるものを生むといふことは、個物が動くといふことでなければならない。一度的なる事實が最勝義に於て個物といふべきであり事實が事實自身を限定する所から知識が始まると考へられる所以である。かかる立場からは所謂具體的一般者の限定と考へられるものは、唯、自己自身を限定する個物と、限定せられる一般者とが合一する場合を意味するに過ぎない。我々の自覺はいつも一般者の一般者の限定として一般者を限定する意味を有つたものである、判断が自覺的限定によつて成立すると考へられるのは之によるのである。私は無の限定として自覺的限定を飛躍的統一とか非連續の連續と云つたが、連續と非連續とは、固、不可分離的のものでなければならない。限定するものなきものの限定として連續的なるものが考へられるのである。連續的直線といふ如きものであつても、單なる個物といふと異なつて、既に一般者の一般者の限定の意味がなければならぬ。連續的に動くもの即ち動く個物といふ如きものは、上にも云つた如く唯、非連續の連續として

のみ考へられるのである。かかる個物が我々の考へられた自己といふべきものであり、それは時間的に自己自身を限定するのである。過去から未来へ流れる連續的時といふものは、かかる意味に於て考へられるものでなければならぬ、所謂時は無のノエマ的限定によつて考へられるのである。有が無によつて限定せられ、無に於てあると考へられる如く、連續は非連續によつて限定せられ、非連續に於てあると考へることができる。それで個物が連續的に自己自身を限定するかぎり、即ち時間的に自己自身を限定するかぎり、事實が事實自身を限定するとして知識が成立するのである。

一般者が自己自身を限定するといふことは、逆に個物的なるものが自己自身を限定するといふことでなければならぬ。自己自身を限定する個物的なるものと考へられるものは、一般者の一般者として一般的なるものを限定する意味を有つていなければならない。それで飛躍的統一のノエマ的限定として動く個物と考へられるものは、自己自身を一般的に限定する意味を有つていなければならない。自己自身を表現する意味を有つていなければならない。我々の事實的知識と考へるものは自己が自己自身を表現することから始まる、コギトが事實的知識の基礎となるのである。我々の意識が單に表現的と考へられる時、我々の自己は未だ個物として自己自身を限定する意味を有たない、意識は單に志向的と考へられる。従つて表現の世界に於てあるものは自己自身を個物として限定する意味を有たない、有るものは唯、一般的なるものとして自己自身を限定する意味を有つのみである。かかる世界が單な

る意味の世界と考へられる。併し一般者はどこまでも個物を限定する意義を有し、個物はどこまでも一般者を限定する意味を有つていなければならない、即ち自覺の意義を有つていなければならない。自己自身を個物として限定するに至らない表現の世界は、一般的自己として自己自身を限定するのである。それが我々のノエマ的自覺として、我々に思惟的自己と考へられるのである、表現的自己の自覺として思惟的自己といふものが考へられるのである。飛躍的統一の限定として動く個物が考へられると云つたが、ここでは尚單なる連續といふ如きものが考へられるまでである。時で云へば、一般的なる現在が自己自身を限定する、即ち限定せられた現在の自己限定といふことができる。併しかかる連續は固、非連續の自己限定として考へられるものでなければならない、連續的時は刻々に消え刻々に生れる瞬間的限定として考へられるのである。飛躍的統一が眞に非連續の連續として自己自身を限定する時、動く個物として個人的自己といふものが考へられる、之によつて事實的知識といふものが限定せられる、即ち個人的自己は事實として自己自身を表現するのである。かかる自己の自己限定は身體的として感官的意義を有つたものでなければならない。感官といふものはいつも個人的でなければならない、否、瞬間的でなければならない。感官といふものが非合理的なるものの合理化といふ意義を有つたものでなければならない、そこに個物的にして一般的なるものを限定する意味がなければならない。併し個人的自己といふものは如何にして限定せられるものであるか。自己自身を愛すると

いふことなくして、個人的自己といふべきものはない、而して愛の限定といふのは、上に云つた如く自己自身を否定することによつて自己自身を肯定する、死することによつて生きるといふことでなければならない。個物が個物自身を限定することによつて一般者を限定するとか、一般者の一般者の自己限定とかいうことの根抵は此に求められねばならぬ。

我々の自己と考へられるものは自己自身を愛するものでなければならない。愛の自己限定として自己といふものがあると考へられるのである。そして眞の愛といふのは自己自身を否定することによつて自己自身を肯定することである、自己に死することによつて他に生きることである。自愛と他愛とは固、別のものではなくして、ノエマ的限定とノエシス的限定の關係を有つて居るのである。ノエシス的限定なくしてノエマ的限定なき如く、他愛なくして眞の自愛といふものはない。併しノエマ的限定の意義を有たないノエシス的限定といふものがない様に、自愛といふものなくして他愛といふものもない。利己主義的倫理学者の説く様に、愛が自己自身を限定する場合、いつも自愛の形に於て自己自身を限定するのである。單なる他愛といふ如きものはない、それは單なるノエシス的限定といふに異ならない。併しその故に他愛はその根抵に於て自愛であるといふべきではない。従来、倫理学者の考へた自愛といふのは欲求の満足を意味するに過ぎない。かかる意味に於て自己を愛するといふこと

は、愛すべき自己を失うといふことに外ならない。眞の自愛は他愛を含み、眞の他愛は自愛の意味を有つたものでなければならない。自愛は他愛を限定し、他愛は自愛を限定するのである。その間、恰も個物が一般を限定し、一般が個物を限定する意味がなければならぬ。社會なくして個人といふものはない、我々は社會に於て生れ、社會によつて限定せられるのである。併し個人なくして社會といふものはない、個物が個物自身を限定することによつて一般的なるものが限定せられると考へられる如く、社會は個人によつて限定せられ、個人によつて進展するのである、タルドの如く極微がアルファでありオメガであるといふことができる。社會的ならざる個人がないと共に、社會は個人に於てその存在の基礎を有つて居るのである。自覺といふのは自己が自己に於て自己を見るといふことを意味すると考へるならば、かかる意味に於て自覺の場所と考へられるものは社會といふ如き意味を有つたものでなければならない。人格的自己といふのは固、カントの所謂目的の王国といふ如き意味に於て、組織せられたものでなければならない、我々の心の内は一つの人格的社會である。我々の自覺的過程の一歩一歩が絶對の自由でなければならない、非連續の連續が眞の人格的統一と考へられるものである。かかる統一は、飛躍的統一として、どこまでも個物的なるものが一般的なるものを限定する意味を有つてゐなければならない、非合理的なるものが合理的なるものを限定する意味を有つていなければならない。かかる非合理的限定が身體的限定と考へられるものであり、昇華せられた身體が個性を

有つた人格と考へられるものである。身體なくして個性といふものなく、個性なくして我といふべきものはない。單に他愛的自己といふものもなければ、單に義務の為に義務を尽すといふ理性的自己といふものもない。他愛とか義務とかいうことは、主語的意義を有する自愛的自己の述語的限定の意義に過ぎない。單なる理性や單なる他愛は、何らの行為の動機も与えない。良心と考へられるものは、最も深い意味に於て非合理的なるものの合理化といふ意味を有つたものでなければならない。我々の眞の自己とは瞬間的限定の底から自己自身を限定するものでなければならない、我々は眞の瞬間的限定に於て永遠なるものに接するのである。我々は日常時々刻々に瞬間に接して居ると考へて居る、併しその實、我々はいつも唯、過去に接して居るのである、瞬間に接して居るのではない、單に因果に押し流されて居るのみである。唯、我々が眞に一身を賭する時のみ、眞に決断する時のみ、我々は眞の瞬間に触れるのである。瞬間的限定に於てそれに触れると考へられる眞の永遠は、單に生ぜず滅せざる所謂永遠不変といふ如きものではなくして、絶對無の自己限定として到る所に死し、到る所に生れるものでなければならない。かかる意味に於て、それは絶對に非合理的と考へられるものでなければならない。我々が瞬間的限定の底に於てかかる永遠に触れると考へられる所、そこに我々の眞の自己があり、そこに我々は眞の身體を有つのである。パウロの所謂霊の體と称すべきものは、かかる意味に於て我々の歴史的身體といふべきものでなければならぬ、所謂肉體と考へられるものはかかる身

體の映像に過ぎない。我々は肉體的自己を脱却して永遠の無に接すると考へられる時、そこに我々は個人的自己を失うのではなく、歴史人として却つて眞の個人的自己を有つのである。かかる意味における個人に於ては、自愛は即他愛であり、愛の自己限定が直に當為でなければならぬ。絶對に非合理的なるが故に、合理的なるのである。我々は根本的に悪なるが故に良心を有し、個人的なる故に社會的限定の意も味を有つていなければならない。瞬間が瞬間自身を限定すると考へられる時、そこに一つの世界が限定せられる意味がなければならない。時が限定せられることによつて一つの世界が限定せられるのである。

自己自身を否定することによつて自己を見出す即ち死することによつて生きるといふ愛の限定には、當為が含まれていなければならない、厳粛なる義務が含まれていなければならない。自己自身に死するといふことは、自己の欲求を否定することを意味するのである。併し欲求の方向に死することは、眞の自己に生きることでなければならぬ。動く個物となるには個物は死ななければならない、個物も死することによつて生きるのである。自己が自己の欲求を否定して死に入ると考へられる時、それが歴史的自己として一般的なるものを限定する意義を有たなければならない、そこに當為的自己の意味が含まれていなければならない。そこに個物が一般を限定し一般が個物を限定する根本的意義があるのである、時の一つの瞬間から他の瞬間に移るにも、そこに當為の意義が含まれて居るのである、そ

れは外的必然の推移ではなくして内的必然のそれでなければならない。かかる場合、我々は個人的自己を失つて一般的自己となると考へられる。併し我々は個物として死することによつて、動く個物となることを忘れてはならない、即ち個性を有つた自由の自己となることを忘れてはならない。かかる自己は往々、純なる理性として叡智的自己と考へられる。併し單なる理性は自由でもなければ、自己でもない。却つてそれは絶對に非合理的といふべきものでなければならぬ、絶對に非合理的なるものの合理化として、それが眞に個人的自己と考へられ、自由の自己と考へられるのである。自己にはどこまでも身體的限定の意味がなければならない、感官的といふ意味がなければならない。自由意志といふのは何らの拘束なき無内容なる抽象的意志と考へられる。併し自由意志とは自由なる個人の自己限定でなければならない。何人の意志でもない單に抽象的なる自由意志といふもののあるはずはなく、又單に無内容なる任意的意志といふ如きものは單なる偶然と云ふべきものであつて、意志といふべきものでない。自由意志の基體たる自由人とは如何なるものであるか。我々は之をノエマ的方向に感官とか衝動とかいうものの底に考へることができる、かかる場合それは生理的身體といふ如きものが考へられる外ない。そこには因果的必然といふものがあつて、自由といふものはない。更に何らの限定なき全然非合理的なるものを考へれば、それは單なる偶然と考へられる外ない。之に反し、之をノエシス的方向に即ち自己自身の底に求める時、それは理性といふ如きものと考へられる外はない。併し

理性自身の決定に自由といふものもなければ、我々の自己が單に理性となつた時、自己といふものではない。唯、我々は歴史的實在として眞に自由人といふことができるのである。瞬間が瞬間自身を限定する底に自由人といふものがあるのである。自由人とは歴史的身體を有つた人でなければならない、具體的意義に於ての感官といふものは固、身體的意義を有つたものでなければならぬ、非合理的なるものの合理化の意義を有つたものでなければならない（この故に感官によつて知識の客観性が与えられると考へられるのである）。瞬間から瞬間に移り行くことによつて時の連續といふものが考へられるには、瞬間的限定の底に無から無に移り行くものがなければならぬ、否定から否定に移り行くものがなければならぬ、個人の底に個人を破壊するものがなければならぬ。それが悪意志といふものであり、根本悪といふべきものである、而もそこに我々の歴史的實在性があるのである。我々の感官とか身體とかいうものは、かかる意味を有つたものでなければならない。具體的感覺はそれ自らが誤りであり、迷でなければならぬ、單なる感覺といふ如きは思惟の作為に過ぎない。併し瞬間的限定の底に自己自身を否定するものは、愛の自己限定として死することによつて生きるものでなければならない。メフィストの如く常に悪を欲する悪魔は常に善を造る意味を有つて居るのである。　死が生の意義を有つ時、愛の自己限定は當為の意味を有たなければならない。個物が自己自身を否定して他の個物に移ると考へられる時、自己自身を一般化せなければならぬ。それが一般的自己と考へられるものである、

當為によつて個物が個物へ移るのである。一々が絶對の無に接すると考へられる瞬間と瞬間とを繋ぐものは當為でなければならない。個物が個物自身を限定する個物的限定の底に深くなればなるほど、自己自身を破つて一般的となる傾向を有つのである。自己自身の罪の深さを知るもののみ、眞に良心を有するものである、當為は人格的愛の自己限定の声でなければならぬ。我々の自己の底にはどこまでも自己を否定して否定から否定に移る、即ち無から無に移るものがある。それが身體的限定として自由意志と考へられるものである。併しかかる否定的限定は死することによつて生きる愛の否定的限定として、一面に當為的限定の意義を有し、個物が一般的なるものによつて限定せられる意味を有つて居る。而して一般者によつて限定せられると考へられるかぎり（當為によつて結合せられると考へられるかぎり）自己といふものが見られるのである。飛躍的統一の底には自由意志がなければならぬ、それが一般者によつて限定せられると考へられるかぎり、連續的自己と考へられるものが見られるのである。

個物が動く個物として點から點へ移るには、個物は自己自身を破壊せねばならぬ。個物が破壊せられるといふことは、一つの具體的一般者が破壊せられるといふことでなければならぬ。個物と考へられるものは對象化せられた自己であるかぎり、それは自己自身を破壊するものでなければならぬ、自己自身を破壊することによつてそれが眞の個物であり得るのである。個物は破壊せらるべく有るので

ある。個物が破壊せられるといふことは具體的一般者が破壊せられることであるとすれば、そこに破壊せられた一般者といふものが考へられねばならぬ、自己自身の限定を失つた一般者といふものが考へられねばならぬ。自己自身の限定を失つた自己といふ如きものが表現的自己といふ如きものであり、自己自身の限定を失つた抽象的一般者の内容といふ如きものが單なる意味と考へられるものである。而して斯く個物が破壊せられるといふには、その根抵に否定から否定に移る自由意志がなければならぬ、根本悪がなければならない。かかる立場からはこの世界は單なる表現的意味の世界であり、偶然の世界である。併し死することは生きることであるといふ愛の立場に於て、破壊せられた個物は動く個物として生きるのである。根本悪は唯、神の絶對愛によつてのみ救われるのである。斯く愛によつて包まれるかぎり、自己といふものが見られるのである、我々は唯、神の愛の中にのみ自己を見るのである。個物は固、破壊せらるべくあり、點から點へ移るべくあるのであるといふ意味に於ては、自己は一般によつて限定せらるべくあるのである、罪は悔い改めらるべくあるのである。個物が一つの具體的一般者として自己自身を限定すると考へられる時、既に一般者の一般者の限定といふ意味がなければならぬ、而して一般者の一般者の限定といふことは當為の意味を有つのである。個物が破壊せられると考へる時、自己自身の限定を失つた一般者として表現の世界といふ如きものが見られると云つたが、個物は生きるべく死するのであるといふ意味に於て、表現の世界は同時に當為の世界の意味

を有たなければならぬ、そこに思惟の世界といふ如きものが考へられるのである。而も個物が個物自身を限定して行くには、その底に無より無に移る意志がなければならない、そこに我々の無限なる欲求の世界があるのである。かかる欲求の基體として自己自身を限定する動く個物と考へられるものが、我々の身體的自己と考へられるものであり、それは行為的に自己自身を限定すると考へられるのである。個物が自己自身を破壊すると考へられる時、表現といふものが考へられ、それが點から點へ移るといふ意味に於て當為といふものが考へられ、かかる限定がその根抵に於て絶對に非合理的なるものの合理化といふべき身體的限定として行為と考へられるのである。而して行為的に自己自身を限定することが自己自身をイデヤ的に見るといふことである、イデヤと考へられるものは動く個物の自己限定の内容であり、人格の内容といふことができる。愛の限定として他に於て自己を見るかぎり、イデヤ的内容が見られるのである、我々が動く個物として身體的に自己自身を限定するといふことは、その根抵に於て事實が事實を限定するといふことであり、個物が個物自身を限定することによつて一般的なるものを限定するといふ意味に於ては、それは社會的に自己自身を限定するといふことを意味する。個物が一般を限定し一般が個物を限定すると考へられる如く、社會は個人を限定し個人は社會を限定する。かかる社會的限定の内容がイデヤと考へられるのである、社會は當為によつて動くのでなく事實的にイデヤを限定すべく動くのである。事實が事實自身を限定するといふことと行為的限定と

いふことは一見異なるように考へられるが、外的感官は行為の意義を有し、行為の底にはサンチマン・アンチームといふ如きものがなければならぬ。身體的限定に於て内的事實即外的事實、外的事實即内的事實である。總て直接に有るものは、かかる意味に於て内的即外的、外的即内的なる身體的限定としてあるのである。即ち動く個物としてあるのである、それが歴史的實在といふものを意味するのである。それで歴史的に有るものは、行為的に自己自身を限定するもの、即ち行為するものとして有と考へられると共に、一方に個物が壊れるといふ意味に於て表現的意義を有し、自己自身を否定して他に移り行くといふ意味に於て、當為の意味をも有つて居る。併し動く個物として他に於て自己自身を限定するかぎり、即ち行為するかぎり、イデヤを見るといふ意義を有つて居る。行為的に自己自身を限定する動く個物の底には、固、辯證法的なるものがなければならない。眞の自由意志といふのは現實を離れた無内容なる任意的意志といふのではなくして、死によつて生きるといふ意味を有つたものでなければならぬ、辯證法的に自己自身を限定するものが眞に自由なるものである。感覺を否定することによつて自由に到るのでなく、感官を通して自由に到るのである、非合理的なるものの合理化が眞の自由と考うべきものである、イデヤといふのは感官的内容の合理化せられたものに過ぎない。而してかかる辯證法的限定に於ては、個物と一般との關係は個人と社會との關係でなければならぬ。個人は社會に於て生れると共に、社會的となるといふことは個人が死することであり、個人が個人に生

きることは社會を否定することである。之と共に社會が自己自身を限定するといふことは個性化することであり、個性化することは社會が自己自身を否定することである。感官的なるものが自己自身を合理的に限定するといふことは、社會的に自己自身を限定するといふことでなければならぬ。非合理的なるものの合理化といふことは、その根抵に於て社會的といふ意味を有つていなければならぬ。感官的なるものは社會的にあるのである、歴史的有である。辯證法的限定を眞の無の限定として考へる時、斯く考へざるを得ない。辯證法的限定がヘーゲルのそれの如くノエマ的限定の意義を有し、有の限定の意義を脱せざるかぎり、それから單なる表現とか當為とかいふ如き抽象的なるものは出て来ない、即ち非時間的世界は考へられない。併し眞の辯證法はかかる意味に於て成立するのでなく、否定の肯定として成立するのである、その底に他愛の否定的意義がなければならぬ。そこに社會的限定の意義があり、無数の個人が限定せられるのである。我々の人格と考へられるものは、否定の肯定として考へられるのである。愛の絶對否定の立場に於ては、破壊せられた一般者の世界即ち非時間的世界といふ如きものが現れる。併しその底に無から無に移り行く意志といふものが認められるかぎり、動く個物として個人的自己といふ如きものが成立するのである。斯く愛の自己限定として有るものが動く個物といふ如きものであるといふことは、それが行為的に自己自身を限定するといふ意味を有すると共に、個物が個物自身を破壊するといふ意味に於て表現の意義を有し、次に移るといふ意味に於て

當為の意義を有つて居る。辯證法的に自己自身を限定する歴史的有は、行為的なると共に表現と當為との意義を有つていなければならぬ。而してその根抵に於て無から無に移ると考へられるかぎり、事實が事實自身を限定すると考へられるのである。事實が事實自身を限定するといふのも、單に非合理的と考ふべきでなく、既にかかる意義を有つていなければならない、當為も一種の事實である。

（昭和七年〔一九三二〕二月、三月）